

學界展望

社會學界の近況

白井 二尚

終戦後の日本が負ふ第一の課題は民主日本の建設といふ事であらうが、民主主義の實現されるのは人民各自が齊しく主體性自主性を有つところに於てであり、主體性自主性は行爲者が自ら思惟判断決意行動するところにのみ存する。而して行爲者が自ら思惟判断決意行動し得る爲には、行爲の場所たる社會的現實をよく知つてゐなければならぬ。斯くて社會的現實に就いて

人民一般がよく知る事が民主主義の根本條件をなす事は明かであるが、此の條件を満たす爲には社會的現實に就いての知識が一般に普及する事が必要である。此の必要に應ずる爲に終戦迄は酷過されてゐた社會科學特に排除されるに近い状態にあつた社會學が戦後急にもはやされて、小學校から大學迄社會科又は社會學が設けられるに至り、之を講ずるべきや適當な參考書乃至教科書に對する要求が高まりながら、此の要求の充たされ難いのが嘆ぜられてゐるのが現状である。斯くて嘗て一度社會學を専攻したがその後之から遠ざかつてゐた人や社會學に僅かのつながりのあるに過ぎぬやうな人まで動員されたと共に、社會學の概論・汎論・通論・要講・入門・序説等々の書物が發出

して來た。此の種のものの中には多年正統の社會學の研究に精進して來た人々の價値高い勞作もあるが、出版業者が一時の急に應ぜんとして著者をせき立てた結果のものも少くない。右の事情はまた社會學更に社會科學の講座や辭典を現れしめ、現在なほ計畫中のものも一、二には止まらない。同時に社會學や社會科學一般の方法論的な反省解明も起つて來た。此の方面で最も論議の對象とされてゐるのはマックス・ウェーバーであらう。更に社會學や社會科學全般の文獻の解題も種々試みられ、概説書に収録され又は單行本となつてゐるが、文獻の選擇と解説が往々にして偏局的であるのは惜しい。

終戦迄の我國の理論や論議が兎角抽象的觀念的に過ぎて具體性を缺き現實を離れた思辨の弄びに陥り易く、爲に目前の動きに追隨し之を理論づけ辯護するの具に化する傾きのあつた事に對し、反動的に事實を正確に把握認識し之を論議の根據とせんとする實證的態度が、アメリカの學風の影響の下に興隆して來た。従來は社會の實態調査の如きは末梢の事として蔑視され勝ちであつたが、最近では各種の實態調査が行はれ出した。斯かる機運に應じて社會調査の方法・理論・實際を敘述した書物が若干刊行されてゐる。(併し現實態を充す無限の事實の如何なる部分を如何なる認識目的の爲に調査するかを十分明らかにする事なしに、可般の事を雜然と調査するのみで、捉へられた事實が如何なる意味を有つかも明確にされてゐないやうな調査も無いではないやうである。)事實の調査には數量的扱ひの必要が多く、従つて統計學が重視されて來た。戦後我國にとつて最も

切實なる問題の一つは人口問題であるが、我が國人口の實態に就いての統計的研究によつて、人口上の各種の問題が漸次明かにされつゝある。輿論の問題も民主主義と結合して研究の對象となり、輿論調査の方法や技術が種々論究解説されてゐる。

戦後教育が改新され論議研究の中心をなすと共に、教育社會學乃至之に連關する題目の書物や論文が多數現れたが、何れも未だ試論や構想の範圍を脱せず、教育社會學とは抑も何であるかに就いても、各人各様の解釋を下してゐる有様であつてその内容は曖昧であり難然としてゐる。アメリカ社會に就いての研究も大いに興り、アメリカの市民生活、社會史、社會思想史等を解明せる書物も續出してゐる。同時に日本に就いても各方面の研究が試みられ、特に庶民生活史・海村生活・山村の構造・結婚等に就いては、優れた研究が公けにされた。猶又戦時中自由論議する事の許されなかつた問題に就いて思ふ儘にはなくとも或方面の自由は許容されるやうになり、又論じ得ても特定の論じ方は抑壓されてゐたが、抑壓の怖れなく論じ得るやうになつたのも一つの變化である。愛國や祖國の問題が自由に論ぜられ、多元的國家論の主張も認容されるが如きは、斯かる自由の一端である。

日本の社會學關係者を包括する日本社會學會は幾十年も前の日本社會學院の後を承けて怖らく大正末期から結成され、戦争によつて一時中絶してゐたが、戦後間もなく毎年大會を東京・京都等各地に開催し、基礎理論特殊問題等諸部門に分れて、會員の自由な研究發表を求めて來た。此の大會の發表の題目は正

に現代日本社會學界の研究の縮圖たるの觀がある。各發表の後に質疑應答の時間があり、活氣ある應答が見られるが、何分にも一人に許される時間が僅かな爲に、述べて盡くさざる恨みが残され勝ちであるのは、自然科學と異る社會科學の學會の免れ難い制約である。日本社會學會は更に東京・關西・九州等各地に支部を有ち、各都會夫々特殊な形式に於て研究報告、講演等を行つてゐるが、參會者は何れも年毎に増加の傾向にあるのも、社會科學の普及を表示するものと見られよう。更に、社會學・宗教學・言語學・民俗學・民族學・人類學・地理學・考古學等の八科學を併せた八學會連合大會が廿二年以來毎年開催され、同一研究課題例へば稻・家・東京等の如きについて各科學に於て特にこれを研究してゐる人に豫め報告を依頼しておいて、發表を求め、此の外自由なる研究報告や、學界展望の論述等をなし、更に連合して同一地域の調査研究を試みる等新たな動きを展示しつゝあるのも注目し得る。斯かる動きの健全なる發達は各科學を新たなる段階に推進するであらう。

國際東洋學會議のことなど

長尾雅人

第廿一回の國際東洋學會議 The Twenty-First International Congress of Orientalists が一九四八年に、パリで開かれた。全世界からの東洋學者その他約四百名の人々が集り、七月廿三